

世界

1946年1月1日創刊
2020年10月1日発行
(毎月1回1日発行)

2020 October
no.937

SEKAI 岩波書店

10

世界

SEKAI

2020

特集

攻撃する自衛隊

一九四六年一月一日創刊
二〇二〇年一〇月一日発行
(毎月一回一日発行)

世界 第九三七号 二〇二〇年一〇月

©岩波書店 2020年 本誌掲載記事の無断転載をお断りします。

編集・発行者 熊谷伸一郎 印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 (株)岩波書店 本誌編集部電話 03 (5210) 4141 FAX 03 (5210) 4144

特集 攻撃する自衛隊

池内了 半田滋 藤岡惇 伊波洋一 杉原浩司 ほか



新連載 **分水嶺**——ドキュメント・コロナ対策専門家会議 河合香織

新連載 **コロナ戦記**——永寿ケース 山岡淳一郎

共犯ではないメディアのために 南彰

オンライン教育の拡大と子どもの学ぶ権利 中嶋哲彦・宮澤弘道

書評 | 酒井隆史 植木不等式 宇田智子 向井和美

新連載 ドキュメント・コロナ対策専門家会議 河合香織
新連載 コロナ戦記 山岡淳一郎
共犯ではないメディアのために 南彰

10

定価(本体八五〇円+税)



hmaen.com

雑誌 05501-10
ISSN 0582-4532
Printed in Japan



4910055011004
00850

グローバル都市をあるく

ソウルの夢

連載……第2回 江南II

——「江南左派」の構造

キム・ソンミン 一九七六年韓国・ソウル生まれ。北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授。著書に『KPOP 新感覚のメディア』(岩波新書)など



多くの若者が行き交う江南駅前。
右手には「江南駅運動」の舞台となった江南駅10番出口がある。(筆者撮影)

世界 SEKAI 2020.10

世紀末の断絶

漢江(ハンガン)に架けられた聖水大橋(ソンス)が崩落するという事故が起きた一九九四年、大学一年生だった私は、映画『はちどり』の主人公たちのように、漢江の南側からその信じられない光景を眺めていた。この橋が再開通されたのは九七年七月。皮肉にも、韓国がOECD(経済協力開発機構)に加入した九六年一月と、アジア通貨危機でIMF(国際通貨基金)の管理体制に入った九七年一月とのちょうどあいだの出来事だった。先進国と途上国のあいだに立たされたアンビバレントな感情を、「世界化」という言葉が流行した九四年に、ソウルの人びとは抱きはじめていた。

IMFのミシェル・カムドシュ総裁が「韓国がIMFを卒業した」と宣言したのは、九九年一月。わずか二年での早期卒業だったが、その二年間ですべてが変わった。何よりソウル一極集中が激しさを増した。「国土」は、ソウル・首都圏のメガエリアと地方とで完全に二分された。ソウルも大きく変わっていた。江南一極集中が進み、江北(カンフク)と江南の明らかな断絶が生じた。

それを痛感させたのはやはり不動産だった。一時期下落を経験した江南の不動産は、IMF危機から一年も経たないうちに回復し、その後むしろ暴走するように上昇してい

った。九九年から二〇〇三年の住宅価格の上昇率は、江南が八五・一パーセント、江北が三一・六パーセントで、その差は五三・五ポイントにのぼる(ソウル市政開発研究院資料)。原油価格安、国債金利安、米ドル安によるいわゆる「三低景気」で好況を呈していた八六年から九〇年までの上昇率の差(三九・二ポイント)よりも高い数字だった。

萎縮していた投資や消費も、江南を中心に回復した。江南は、あの未曾有の「IMF困難」から抜け出す動力であり、その反作用のような利益を独占した場所でもあった。そして、人びとは「江南住民」という言葉から、「貴族」のような響きを感じはじめた。

パラダイムの転換

アジア全体を巻き込んだIMF危機は、巨大国の利害が複雑に介入した国際的な現象だったが、国内の文脈でいえば、独裁開発のもとで高度成長を牽引した産業化モデルの終わりを意味していた。手抜き工事・管理で崩壊した聖水大橋の姿を、人びとはその象徴として受け止めた。

政府や企業はもちろん、社会全体が根本的なパラダイムの転換を求められた。

その方法として、知識基盤産業を中心とした経済の再編が進められた。二〇〇三年の時点で高速インターネットの

普及率が八一・九パーセントに達していた強力なIT政策のもとで、通信・金融保険・不動産賃貸・ビジネスサービス・公共行政・教育サービスをふくむ知識基盤サービス業が急速に成長した。

その拠点を担ったのは、地下鉄二号线三成駅(サムソン)と江南駅十字路をつなぐ「テヘラン路」だった。この往復一〇車線道路の周辺は、すでに八〇年代後半から商業・貿易・交通の新都心として浮上していたため、情報化とグローバル化を進めるにもっともふさわしい場所だった。二〇〇〇年初頭、インターネット企業の八〇パーセントが集中したこの地を、国内外のメディアは韓国のシリコンバレーという意味で「テヘランバレー」と呼んだ。その後、サムソンや現代(ヒョンデ)などの財閥企業や巨大大保険・金融企業、グーグルのような海外のグローバル企業が次々とここに集まった。

五四階のトレードタワー(一九八八年完成)から、四四階の江南駅のサムスタウン(二〇〇八年完成)のあいだを埋め尽くしている超高層ビルの風景は、グローバル都市と化したソウルの象徴とされた。二〇一〇年、韓国がアジア初の議長国をつとめたG20首脳会合が、トレードタワーのある貿易センター・コエックスで開催されたのは、ある意味わかりやすい選択だった。

超高層ビルの下に広がるガラスのような風景とリズムが



らも、その場所性を感じることができると。たとえば、この三七キロメートルの区間に集まっているカフェの数は四五〇店以上。情報と移動性を重視する新たなビジネスと生活様式が生んだ、世界のコーヒージェーンズの激戦区でもある。

九〇年代から流行の発信地として浮上した江南駅は、「Kビューティー」のホットスポットをはじめ、グローバル

な流行を消費できる店でつねに賑わっている街だ。二〇一九年にBTSのポップアップ・ストア(定期期間開かれる複合体験空間および店舗)がオープンしたのもここだった。

その一方で、三成駅六番出口と直結する「コエックスモール」は、究極の都市イメージを追求した、アジア最大規模の地下複合施設である。三五九七席のシネマコンプレックスと巨大なアクアリウム、ピョルマダン図書館をはじめとした約四二〇の施設を訪れる人の数は年間約二〇〇〇万人にのぼる。二〇〇〇年のオープン以降、映画好きで有名な

の大学に限らない。二〇一八〜一九年学期にアメリカの大学に留学した韓国人は五万二二五〇人で、この数は中国とインドからの留学生に続いて三番目に多い(日本人は一万八一〇五人)。ここでは、国内外を問わず、「名門校」に入るための完璧な「コディネット」を受けることができると。

大峙洞を中心とする「SKYキャッスル」(話題となったドラマのタイトル)を生んだのは、学歴が不動産とともに確実に相続可能な資本であるという認識だ。この住民たちは、情報と人のネットワークを「教育」に集中させ、「江南住民」としての地位を再生産するメカニズムを定着させた。そして、狎鷗亭洞から始まった不動産と大峙洞から広がった学歴、その両方を軸にした「江南」という特権空間が完成された。

「江南左派」と大衆文化

二〇〇〇年代以降、経済構造の転換とともに若い世代が江南に進入する過程は、「八〇年代に大学生として民主化を経験した六〇年代生まれ」という意味の「八六世代」や、IMF危機直前まで文化的黄金期を主導していた七〇年代生まれの「X世代」が、社会の新たな主流になっていく過程でもあった。

それまでの江南では「江南Ⅱ利益追求Ⅱ保守」という等式が当たり前のように定着していた。しかし、この頃の江

なソウルの人びとがここで「マルチプレックス」という新たな映画体験になれていったように、常に変化し続ける「消費」の形がここにはあった。国内と海外の訪問客の区分もここでは意味がない。ローカルな文脈から離れて、グローバルなトレンドへの欲望を誠実かつ緻密に媒介するだけだ。

学歴の特権空間

テヘラン路を中心とする江南で情報化とグローバル化が急速に進むことで、その担い手となる若い世代も次々と江南に進入した。その多くがITエンジニアや医師、弁護士、大学教授、記者などの高学歴専門職従事者の「エリート」たちだった。新しい「江南住民」たちは、学歴をめぐる「情報」を中心に、上の世代の富裕層とは異なる特権空間を構築していった。

テヘラン路の半分と面している大峙洞(地図中グレーで示した地域)は、その象徴となる場所である。大峙駅一番出口から出ると、受験予備校や学習塾、留学コンサルタントなど、高級アパートに囲まれた一〇〇〇以上の私教育施設が左右に並ぶ。学生を迎える高級車が集まって混雑する夜一時になるまで、異様な緊張感がこの空気をつくる。

ここで求められる学歴は、ソウル大(S)、高麗大(K)、延世大(Y)を指す「SKY」という言葉で象徴されるが、国内

南では、新しい集団意識が目立ちはじめた。経済的には高い生活水準を保ちながら、政治・社会的にはリベラルな意識を持っており、「保守派」はもちろん革新派の「運動圏文化」とも距離を置く。彼ら彼女らは、古い政治構造に對抗するとともに、人権や福祉など、それまでの政治の枠では大きく扱われなかった生活政治の空間を広げていった。

その力は、インターネットが主な政治メディアとなった二〇〇二年大統領選挙以降急速に可視化されていった。韓国社会に与えた衝撃は大きかった。「自分の利益に反する政治的声を出す」この集団をどのように捉えるべきか、二〇一〇年前後から論争が活発に行われた。その集団を指すために、「江南左派」という言葉が生まれた。

「江南左派」の登場は二つの意味を持っていた。一つは、「江南」の意味が地理的な江南を越え、韓国社会の既得権益の象徴として完全に定着したこと。もう一つは、高度成長以降、民主化と資本主義を定着させていった韓国社会が、より普遍的な西欧的ブルジョア社会と化したことだった。

「キャピタル左派」(フランス)、「シャンパン社会主義者」(イギリス)のように、厚いブルジョア社会(もしくは市民社会)を持つ欧米諸国には、既得権益と革新派という両極端の意味を並べた言葉が存在する。その中でも「江南左派」と呼ばれる集団は、「リムジン・リベラル」という言葉を持

つアメリカの中産白人エリート集団（もちろんここでも白人の人種だけを指すわけではない）に近いといえる。不平等な社会構造を前提として認めたくなくて、積極的な政治的・社会的活動を通じて現実を改善しようとするアプローチと態度。

「江南左派」的な集団の存在感がもつとも鮮明に示されたのは、ほぼ同時に世界的に拡散していった「韓流」、つまりメディア・大衆文化だった。映画やドラマ、放送、K-POPがアジアから世界へと成功の幅を広げていったこの文化現象を担った作り手の多くは、中間層としての生活基盤と高学歴に基づいて高度の文化資本と教養を持ちながら、リベラルな政治・社会的意識を洗練された形で表現する人びとだった。作り手だけではない。二〇〇〇年代以降の韓国の文化市場において、消費者の主流は、商業的な完成度とリベラルな政治的方向性を同時に支持する大衆だった。その中で、メディア・コンテンツとしてのKカルチャーが持つ次のような特徴も定着した。

- ① 世界のトレンドに開放的な感受性とイメージ
 - ② 商業性と社会性を大胆に接合させる企画とテクニク
 - ③ グローバルな文化産業・プラットフォームとの親和性
- そういう意味で、映画『パラサイト』が四冠を達成した二〇二〇年アカデミー賞の舞台は、「江南」を中心に育った韓国のブルジョア社会の世界観と感覚が、アメリカ・プ

の江南のアパート価格では、次の世代が「江南」に自力で新規参入することは不可能に近い。学歴競争の構造が「住む場所」によって決まってしまうのを眺めているしかない若者たちの剝奪感、「ヘル朝鮮」などの流行語を例にあげるまでもなく、限界に達している。そうなれば憧れすら生じないだろう。皮肉にも「江南左派」が容認してきた不平等によって、これまでの「江南」をめぐる欲望のバランスが崩れているのだ。

「江南左派」は中間層が拡大・多様化することで生まれた存在だ。それゆえ「江南左派」への感情が揺れるのは当然のことだろう。ここ数年ソウルで起きているのは、保守派と革新派の単純な争いではなく、「江南左派」を超えた中間層の再構造化である。その変化によって、ソウルの社会的感覚が強く投影される「K的なもの」もまた変わっていくだろう。

第三の政治と「K的なもの」

じつは、「K的なもの」の変容はすでに起きている。きっかけは、二〇一六年に起きた「江南駅一〇番出口」から広がった大規模なフェミニズム運動だった。発端は、江南駅近くの共用トイレで、二三歳の女性が見知らぬ男に殺害された事件で、多くの女性たちが女性蔑視や差別に対する

ルジョア社会と最も劇的に出会った瞬間でもあった。その時Kカルチャーが獲得した普遍性とは、描かれた「格差」そのものにあるのではなく、その「描き方」にある。

夢の崩壊

アメリカの「リムジン・リベラル」が、皮肉にもオバマ政権とトランプ政権の両方を誕生させた批判を受けるように、「江南左派」も様々な批判を受けてきた。

「左派」的な側面が保守政権から露骨な弾圧を受けたのは、ある意味わかりやすい出来事だった。『パラサイト』のポン・ジュノ監督や映画『JSA』『オールド・ボーイ』のパク・チャヌク監督などの多くの「江南左派」（実際メディアからそう呼ばれていた）が、李明博・朴槿恵政権による「ブラックリスト」（政府に批判的な文化・言論人八九三二人の活動を管理・排除するために作成したもの）に載っていたことは有名な話だ。イデオロギーと利益を一致させることで権力を守ってきた韓国の伝統的な「保守」にとつて、「江南左派」の文化的影響力ほど厄介なものはないだろう。

一方、近年になって目立つのは、二〇一〇年代に入り、「江南」的な側面に対する反感が日々高まっていることである。もつとも大きな原因は「江南住民」が自ら作り出した分断だ。坪単価一千万円を超えてしまうところもある今

怒りの声をあげた。

それまで江南の都市空間に、政治の記憶はなかった。民主化運動の舞台からは外れていたし、「IMF危機」以降はグローバル都市の中心としての機能が優先されてきた。当然「広場」の文化も、革命の経験もない。

「江南駅運動」は、江南にはじめてといていい「政治」の記憶をもたらした。そのジェンダーの政治は、階級闘争とも世代対立とも異なる第三の政治として、ソウルの日常生活や文化的感受性を変えつつある。

小説『82年生まれ、キム・ジョン』の大成功がその証拠だろう。また、子どもたちをエリートに育てたがる親のもと大時洞で育ったという女性監督がつくった『はちどり』から、これまでの「江南左派」的な匂いは感じられない。政治的ではないからではない。これまでとは異なる政治を語っているからだろう。

「江南駅運動」から始まったその政治は、#MeTooの発祥地アメリカをはじめ、グローバルな動きとリンクしながら、作り手と大衆両方を大きく変えている。ここ数年、男女の性役割、女性の社会的地位など、ジェンダーをめぐる認識と感受性を強く意識するようになった韓国ドラマが、ネットフリックスを通じて世界中でさらなるブームを巻き起こしているのは、決して偶然ではない。